研究紀要　第９号　309－326頁　2001年３月
㈶とちぎ生涯学習文化財団　埋蔵文化財センター

天正期宇都宮氏の城・館についての一考察

杉浦（すぎうら）　昭博（あきひろ）

Ⅰ　はじめに　　Ⅲ　宇都宮氏の支城支配
Ⅱ　城と館　　Ⅳ　城郭の機能論

本稿は、城館を通して中世大名の領国支配を探ることを目的としている。研究の対象については、記録・文書史料を補完する目的で現存遺構を採用することから、天正時代末期に設定し、当時県内において最も大きな勢力であった宇都宮氏の場合について考察することとした。その内容は以下の通りである。先ず、城と館とを定義し、城館に求められた機能を明確にする。次に同様の機能を持つ城郭を抽出し、特に多機能を有した大規模城郭について個々の事例を整理する。さらにこれらについて歴史地理学的な考察を加え、分布の特徴を抑える。最後にこれらの事例と僅かに残されている記録とを照合しつつ城郭経営から天正期の宇都宮氏領国支配の一面を考察するものである。

Ⅰ　はじめに

近年、中世城館研究の進展は目覚しい。従来まで個々に語られてきた城館は、在地領主の支配構造という視点に立った見直しが各地で進められている。

本稿は、天正末年頃の宇都宮氏について、領域内の城館をその機能に着目して分類し、もって同氏の領国支配の一面を考察するものである。

Ⅱ　城と館

「城」とは戦時下に構築される防御施設であり、「館」は日常的な居住の場である。両者の外見上の相違は時代とともに変化しているが、文献資料にあたれば、中世の人々はその時々で城と館とを意識して区別していたことは明白である(1)。極言すれば、戦国末期では、簡素な塁濠が巡っているだけでは城とは認識されていなかった。つまり日常的な居住の場を設けた「城」は存在しても、防御施設が充実すれば「館」とは呼ばれなかったということである。この意味において、「城」も「館」もひとまとめに「城館」と捉えるのは誤りであり、これを区別しなければ領国支配に迫ることはできない。館の塁堀については、千田嘉博氏が「軍事力の重層的な分有、といった中世を貫いた社会体制の特質を念頭に見れば、そうした小さな堀や土

塁は、大名の大軍に攻められれば無力でも、小規模な勢力同士の戦闘では十分機能したのであり、その小さな堀や土塁を備えることに、築城主体であった社会集団にとって重大な意味をもったということを見落としてはならない。」と述べている(2)。確かに本稿の主題に重要なのは城・館の経営主体を見極めることであり、そのヒントとなるのが「小さな堀や土塁は、大名の大軍に攻められれば無力」であったという事実なのである。実際、戦国末期になれば、合戦は常に大きな城郭の近郊で生起しており、特に壬生氏との抗争では互いが相手方の本拠地に乗り込んでの戦であった。一旦発動されれば、軍は難なく境界を突破し、相手領国内に深く侵攻して重要拠点を直接攻撃しているということは当時の領国支配の一面を如実に物語っているといえよう。

このような国人領主間の抗争にあっていわば無視されていた小居館の経営者(3)は、宇都宮氏傍系の子孫や直臣の一族の他、土着の土豪・豪農であったとみられ、その名は数多くの文献資料に記されている。しかし、在地経営の拠点であり、生活を守る場であった彼らの居館は、戦の拠点となることはなく、彼らはより大きな権力である宇都宮氏の動員に応じて近郊の宇都宮氏支城に馳せ参じていたのである。本稿では、まずこのような村々の館と宇都宮氏の直接支配の城郭とを区別することから始めたい。

Ⅲ　城郭の機能論

城郭は互いに機能を分担し補完しあいながら存在していた。松岡進氏によれば(4)、城郭の機能とは、1．軍事側面で領域の中心、2．城領の支配をはじめとする在地支配の中枢、3．大量の兵員の駐屯地、4．領域内外の味方中の証人の収容、5．軍事情報の収集・通報。6．城下の市町における物資の調達、7．交通の監視、8．物資の安定した輸送の確保であるという。こうした城館の機能については、宇都宮氏領国内の城・館に関しても重要な研究課題である。しかし、十分な文献資料や調査発掘事例の集積がない現状では、遺構の復元的考察や歴史地理学的視点からの補完による機能論とならざるを得ない。

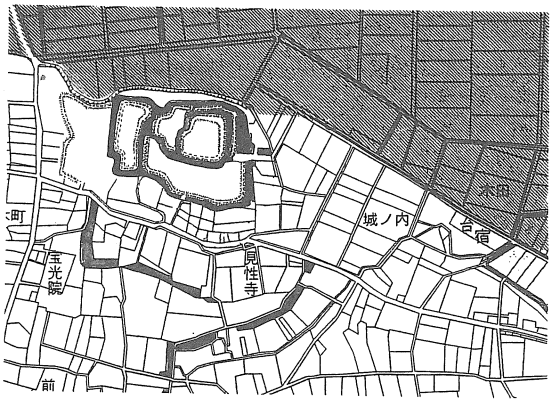
まず、遺構（縄張り）から城・館の機能を考察する視点として次の４点を挙げたい。ａ．虎口や塁線に関する防御機能の発達、ｂ．兵員や物資を収容できる防御的な空間（曲輪）の配置や規模の発達・充実、ｃ．武士団の駐屯地（根古屋地名など）の存在、ｄ．集落地（宿）の存在(5)である。本稿では戦国末期城館の一般的な傾向に照らしつつ、上記４点の条件を満たす城郭を「大規模拠点的城郭」、ａｂｃの条件を備えた城郭を「大規模戦時拠点的城郭」、ａｂまたはａｃの条件を備えた城郭を「館城」、ａのみの特徴が見られる城郭を「小規模城郭」とし、これ以外の館を「居館・居宅」と仮称することとした。なお、城郭は広義においてすべて戦時拠点であるが、ここでいう「戦時拠点的城郭」とは、城を核とする宿村の形成が見られなかっ

た大規模城郭のみを指している。これは、その地域拠点的な機能が軍事的・一時的なものであり、恒久的なものとは認識されていなかった城郭であり、多くは、地域情勢の変化に伴う中絶や再興の歴史を経験すると共に、天正末年には破却されている。

以上の観点から個々の城郭を抽出すると、天正末年頃の宇都宮氏領国内の大規模城郭は、宇都宮城・多気山城[6]・多功城・大宮城・徳次郎城・犬養城・児山城・上三川城・川崎城・御前原城・勝山城・飛山城・岡本城・高根沢城・阿久津城・真岡城であったといえる。以下、その根拠について述べたい。

1．大規模城郭（拠点的城郭と戦時拠点的城郭の事例）

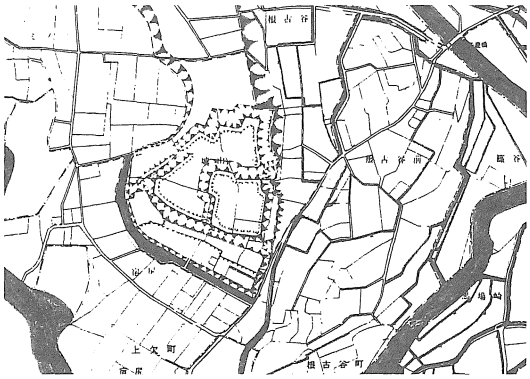
① 多功城　多功城跡周辺は開発が進み、現在は主郭の北側に若干の塁・堀が残るのみとなっている。第1図は野沢一夫氏所蔵多功城古図と戦後の航空写真・地籍図とを照合しつつ推定復元した縄張図である。一見して求心的な縄張りの城郭であったことが分かるが、注目すべきは外郭線の存在と小字「城ノ内」「台宿」である。外郭は古図にも描かれており、堀（もしくは土塁）痕は部分的ながら地籍図でたどることもできる。特に見性寺南では細道がクランク状に屈折し、桝形の存在を窺わせる。外郭が「本町」を囲んでいたかは定かでないが、小字「二の谷」から、集落の西側に谷が想定でき、自然地形が外郭線を形成していたことも考えられる。その集落との関係を見れば、多功郡衙想定地に向かって城西を南北に走る道は古代から存在していた道であり、「本町」は築城以前から存在していた宿であったと考えられる。多功氏系図によれば、多功城は天文二十年に「西館」から「東館」へ移転したとされているが、事実とすれば城（館か）は初めこの道を意識して建設されたと推測できる。城西に対し、城東の「城ノ内」は外郭線内の武家集住地とみられ、見性寺北側には屋敷割りの形跡がある。また、「台宿」はさらに外側に位置する付属の宿であった。このように広範囲な外郭線と宿の存在によって、多功城が拠点的な大規模城郭であった事が知れる。



第1図　多功城縄張図

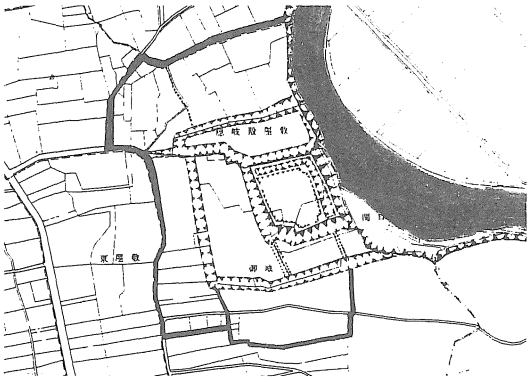
② 犬養城　鹿沼市との市境に位置する犬養城については、遺構がほぼ完存しているにも関わらず、城歴には不明な点が多く、文書にも表れない。伝承に拠れば小山一族の築城とされるが、現存する縄張りに完成したのはその特徴から戦国時代末期であると推定され、当時の周辺情勢からみて宇都宮氏配下の城郭であったことは疑いない。犬養城は別名を「根古屋城」というが、その名の通り城東に小字「根古屋」「根古屋前」「根古屋町」があって、この周辺に城に

詰める者たちの居住地があったことが窺える。一方根古屋とは反対側の南西には「宿尻」の小字がある。現在「宿尻」一帯は水田耕地となっているが、城を巡るように短冊形の地割りが残っており、かつての宿の存在を思わせる。これらのことから犬養城は根古屋と宿とをもった大規模拠点的城郭であったと推測する。



第２図　犬養城縄張図

③　**徳次郎城**　　日光街道徳次郎宿の南東端に位置する徳次郎城も犬養城同様に城主に関する史料的な裏付けが乏しい大規模城郭である。城主伝承のある新田氏については、「宇都宮記」にみえるが、その存在も含めて家臣団中の位置づけは不明である。城は複郭で、「隠岐殿屋敷」等中世城郭特有の曲輪名称と主郭を中心に機能的な曲輪遺構が残るが、外郭は近世日光街道に付属する宿場の発展によって遺構を残さない。



第３図　徳次郎城縄張図

徳次郎城は、現在日光街道のすぐ東側にあり、北には羽黒道が接していて、一見これらの街道に沿った宿を抑える立地であるかのようにみえるが、中世の日光道は現在よりも西に約１㎞程離れたところを走っており、街道に沿って築城されたわけではない。道よりもむしろ田川を重視していたことが考えられる。徳次郎城の城と道・川との位置関係は勝山城に似ており、徳次郎城は田川という要害に拠った軍事的な色合いの強い戦時拠点的城郭である。

④　そのほかの大規模城郭

多気山城　　多気山城は山頂を中心に山麓まで全山を城塞化した県内随一の規模を誇る山城である。山腹には家臣団の屋敷が構えられ、山麓には宿が形成されて、全国的に見ても天文・天正期特有の山城であるといえる。宿の存在については、「清願寺」「下河原」「粉川内」「源石町」など宇都宮城下と共通する小字がみられ、これをもって宇都宮氏本拠の移

多気山城　虎口脇二重土塁

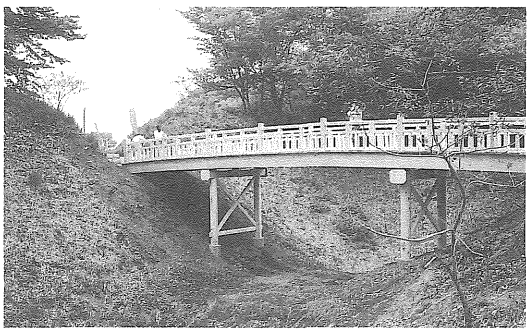
動が行われたとする見解が荒川善夫氏によって示されているところである。

川崎城　城東の小字「館ノ川」に武家集住地があったものと考える。この南側に小字「古宿」があり、ここが川崎城に従属する宿の所在地であるとみられる。

岡本城　城の周辺には「根古屋」「城ノ内」「本宿」「新宿」の小字がある。根古屋が城東の低地であるのに対し、宿は反対側の台地に存在している点が犬養城と共通しており興味深い。

真岡城　城跡の周辺は近世以降も発展し続けて現在に至っているため、中世の景観を復元することは困難であるが、城は芳賀氏の居城であったから拠点的城郭といえ、「口ノ町」「戸外町」「田町」周辺に根古屋もしくは宿が展開していたことが推定される。

以上の拠点的城郭に対し、根古屋を持ちながら宿が発達した形跡のない戦時拠点的城郭には、徳次郎城の他、勝山城・上三川城・御前原城・児山城・高根沢城・阿久津城・大宮城・飛山城が挙げられる。これらの城郭の近郊にも宿の存在は確認できるが、これらは城の存廃と一体であったとは考えにくい。城郭は戦時に限る拠点であったという性格から、既存の宿を吸収するに至らなかったのである。



勝山城　主郭虎口

勝山城　城の地は古来霊場であったと伝わり、中世の宿は城東の「内御堂」にあった。ここは今宮社を核として発展した宿であり、勝山城には兵団が駐屯できる広大な外郭が存在したにも関わらず宿の存在を示す例証がない。

上三川城・御前原城・児山城　何れも家臣らしい人名や方向を示す郭（屋敷）を複数構え、広大な城域をもつ。縄張りは館城の特徴を残し、各曲輪は主郭を中心とする配置にならずに並立的である。従って城郭に関わりを持つ人々の居住地もそれぞれの郭周辺に分散しており、一つ場所に集住する宿の成立はなかったものと考える。

高根沢城・阿久津城など　高根沢城は古記録によれば大規模城郭であったようであるが、現存遺構が殆ど残らないため、その性格を明らかにすることはできない。城が構えられた台地から東方約750mの低地に字「宿」がある。阿久津城は城内に「辰街道」を取り込んだ関所的な性格を持つ大規模戦時拠点的城郭である。大宮城と飛山城については次項でふれることにする。

2．城郭と交通

城郭は単独で存在したのではない。地域の核となる城郭と周辺の小規模城郭、さらには居館・居宅を含めた「城群(7)」が互いの機能を補完し合いながら存在していたのである。居城と支城との連携や各支城の機能を一層明らかにするためには中世の交通に注目しなければならな

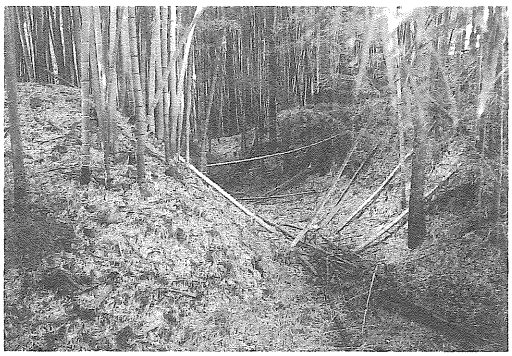
い。ここでは、天正末期に使用されたであろう主要ルートについて考察したい。

多功城　全景（台宿付近から）

①　**奥大道ルート**　　奥大道は大まかに近世の奥州街道にほぼ沿っているルートを想定することができる。南方の境目は多功である。元亀三年（1572）12月の多功原合戦を皮切りに、以後度々侵入を繰り返す北条氏との主戦場は決まって多功周辺であった[18]。北条氏は奥大道を北上して進軍したと想定される。多功城・上三川城・児山城は宇都宮から約12kmの距離にあって一群を構成している。そもそも二里～三里の距離は伝馬制の目安であったから、当地は輸送・連絡手段上の中継点となっていたが、付近に奥大道・宮街道・結城道が集中していたことが、地域の重要性を一層高めたのである。多功城の周辺には居館・居宅が集中しているが、これらの主はいずれも多功氏の一族や配下の者達であった。つまり、この地域の居館・居宅は、村落支配者の住まいであると共に境目の拠点的城郭である多功城と密接に結びついた武士達の生活の場だったのである。

②　**西方ルート**　　この道はかつて宇都宮氏が鹿沼・皆川方面へ侵攻する際に使用していたルートであった。しかるに天正七年頃からルート上にある壬生氏が北条方に与して宇都宮氏を離れ、皆川氏もこれに倣うようになったことで西方への道は閉ざされた。西方城は天正十八年に至っても尚宇都宮氏の持ち城であったという記録があるが[19]、以上の情勢からこれは信じがたい。壬生氏の離反によって宇都宮氏の境目は茂呂・石川辺りまで後退したが、この方面の境目の拠点は更に東へ退いて武子川を渡った地点にある犬養城であった。最前線に拠点が設けられなかったのは、緊迫した情勢の中でより要害性の高い地に拠点を築いたからである。犬養城は本城である多気山城とは中館を繋ぎに姿川で結ばれており、茂呂館や深津館、石川館・上茂呂館・西川田館・上田館などは犬養城を中心とする境目の「城群」なのである。

③　**益子ルート**　　益子氏は天正十一年頃から富谷付近の領有を巡って笠間氏と争うようになり、笠間氏を宇都宮氏が支援したことにより宇都宮氏との関係も悪化した。この時期の益子氏の所領は現在の市貝町南部から益子町にかけての一帯であったと想定され、これに直接接していたのは芳賀氏領内の城館であった。益子へ向かう南方ルートの拠点は真岡城であり、北方



赤羽城　主郭南空堀

ルートには舟戸城・高橋城・赤羽城などが２㎞毎に所在して街道筋を固めていた。舟戸城は水沼館の要害であり、高橋城・赤羽城は館が拡張・補強されて城郭化したものである。現在でも赤羽城の一部に城郭化された居館の一部をみることができる。なお、天正十七年に益子氏が滅ぶと、益子領一帯は芳賀氏の勢力下に置かれたとみられ、真岡城は拠点としての性格を一層強めることとなった。

④　**佐竹ルート**　　宇都宮氏の外戚である佐竹氏は天正年間、求めに応じて度々下野に出陣している。既に茂木氏や武茂氏を家臣化していた佐竹氏は、宇都宮氏の目上の同盟者として領国経営にも大きな影響をもっており、常陸から宇都宮へ至るルートが整備された事は充分考えられる。特にその最短ルートである茂木－文谷－祖母井もしくは高根沢－道場宿の道沿いには繋ぎの城として文谷城・祖母井城が整備され、鬼怒川を渡河する駐留拠点として飛山城が使用された[10]。現存する飛山城の外郭線は直線を基本として一定間隔に櫓台を張り出す構造になっており、複雑な折り歪みを造らない点で比較的短期間に造成された攻撃型の縄張りを採用したことがわかる。広大な外郭はおそらくこのときに最終的な整備が成されたのであろう。それまで芳賀氏の本拠であった飛山城は、宇都宮氏の後見である佐竹氏が後詰めの軍を駐留させるのに最も適した地となった。一方芳賀氏の側では、益子氏の動向が不穏になる状況下で境目近くへ本拠を移動する必要が生じていた。こうしたことから芳賀氏本拠の真岡移城が行われたのである。

飛山城　外郭櫓台と空堀跡

⑤　**那須・烏山ルート**　　那須氏の本拠である烏山へ至るルート途上には駐留拠点の高根沢城[11]があり、境目の城として桑窪城が構えられた。ただ、この方面では大規模な衝突は回避されており、那須一党との主戦場は塩谷地域の領有を掛けた箒川沿いとなっていた。

⑥　**塩谷ルート**　　宇都宮から塩谷へ至るルートは、鬼怒川の渡河地で大きく二つに分かれている。ひとつは岡本付近で渡河する道で、岡本城－阿久津城－勝山城－馬場城と進んで荒川を渡る。繋ぎの城郭には芳賀氏に関係する伝承をもつ大規模城郭が多く、これは、陸運と共に鬼怒川の水運を期待したことと関連がある。もうひとつは瓦谷館－逆面城－中里へと進み、羽黒山北で鬼怒川を渡河し、大宮城もしくは玉生城経由で塩谷へ入る道である。こちらは日光山勢力を牽制しつつ行軍するのに適したルートであるといえる。

⑦　**日光山ルート**　　山岳や丘陵が入り組むこの方面では、陸上交通と共に城郭を結んだ狼煙によるネットワークが想定できる[12]。則ち、多気山城（宇都宮城では八幡山辺り～戸祭館）－

横倉城－徳次郎城－寅巳山－蔵ヶ崎城－高徳城のルートである。これは言うまでもなく日光山勢力の南下東進に備えたものであるが、これと相対する日光山・壬生氏側の日光山－和泉城－板橋城－小倉城－鹿沼城という狼煙ルートも想定できる。天正五年から同十五年にかけての蔵ヶ崎と小倉というやや離れた二地点で同時に両者が衝突する[13]のは、互いに相手ルートの遮断を意図していたことを顕わすものである。

⑧　**鬼怒川**　　鬼怒川西岸の上小倉から上三川まで約30mの間には、２km～５kmの間隔で城館跡が分布している。城館の間隔が５kmに広がる区域には岡本城・平出城が存在し、この他２km～３km間隔に存在したのは全て居館・居宅である。河岸に一定間隔で館が存在したことは、この周辺の農業経営が鬼怒川低地に展開していたことを顕わすものであり、館の間隔は当時の村の規模を示すものとして興味深い。さらに、鬼怒川の水運[14]を考慮すれば、これらの城館は水陸交通という視点から捉えられるものである。

３．城郭の記録から

大宮城　　「今宮祭祀録[15]」によれば、大宮城は天正十五年に再興され、上郷の衆が在城した。これは、当時の軍事的緊張（天正十三年薄葉ヶ原合戦以後、塩谷方面に那須氏が侵攻してくる状況）に備えた境目の城再興の記事である。大宮城は「宇都宮記[16]」によれば、天正四年時点で存在しており、城主と考えられる大宮氏は、「宇都宮興廃記」や「下野國檀那帳」では上級家臣として記録されている。

大宮城　全景（集落より）

しかるに天正十五年に大宮城は「再興」され、上郷の衆が城番に就いたのである。これは次の二点を示唆する出来事である。則ち一つには城郭が恒常的な防御施設ばかりでなく、戦に備えて再整備・再利用されるもの（戦時拠点）があったということ。もう一つにはこうして取り立てられた城郭が在地と強く結びついた家臣に与えられず、土豪の衆が番役を命ぜられたということである。

川崎城・玉生城　　天正十七年に比定される国綱書状[17]によれば、川崎・玉生両「館」の守護を「替役差越」まで玉生遠江守と會曽河土佐守が勤めることが命じられている。文書中、玉生館は現存する詰めの城（要害）を付

川崎城　全景（内川側）

属した館を指すと考えられるが、川崎館が川崎城を指すものかどうかは検討の余地がある。しかし、少なくともこの文書から、川崎・玉生両「館」へは宇都宮当主の命によって家臣が派遣されていたことが分かるのである。また、天正十四年には戸祭下総介が「御番手」として塩谷へ派遣されており[18]、塩谷刑部大輔宛国綱書状[19]によれば、玉生氏は塩谷への「使者」として度々遣わされていた。玉生氏等は当初「使者」であったが、後に「守護」となっているのである。

蔵ヶ崎城　天正五年付保土島筑後守宛某書状[20]によれば、同年、蔵ヶ崎城が「再興」したとある。蔵ヶ崎城も大宮城と同様に戦時に取り立てられた境目の城であったことがわかる。さらにその守備が比較的下級の家臣団に任されていたという点も大宮城と同じである。

宇都宮城　天正十三年と推定される国綱書状[21]によれば、当時の宇都宮城の守備は玉生美濃守高宗等であり、城には「外曲輪」があったことがわかる。中世宇都宮氏の城郭に外曲輪が存在した例証であるとともに、不明な点が多い中世宇都宮城の構造に関わる数少ない史料である。

多気山城　「三十講表白[22]」によれば、多気山城は、天正十三年に「城に取り立て」られている。このことは、結城晴朝書状[23]にも、国綱の居城宇都宮は「無抱」したので、新地を取り立てた。とあることから裏付けられる。宇都宮城の事例とも勘案すれば、天正十三年に宇都宮氏の本拠の移動があったことは確実である。

多気山城　縦堀

飛山城　天正十五年付芳賀高継書状[24]には、平石主膳亮が飛山に「在城」した功績により恩賞に預かり、さらに厳重に守備するように命じられている。さらに「其地在城之者共」と相談して「普請等」を油断無く行うようにともある。このことから、当時の飛山には芳賀氏当主は居住して居らず、城は複数の家臣団によって守備されていたことがわかるのである。

Ⅳ．宇都宮氏の支城支配

1．宇都宮氏の拠点的城郭についての総括

天正末年の宇都宮氏を巡る情勢は、戦時の連続であるが、中でも地域的に見て恒常的な軍事力の保持と在地支配を「拠点」的であると捉え、当時の戦術に即応した巧妙な縄張りと兵団を収容できる広大な郭の存在、流通や生産の基盤となる宿の存在といった観点から拠点的城郭の絞り込みを行ってきた。結果、天正末期の宇都宮氏は多気山城（宇都宮城）・多功城・犬養城・川崎城・真岡城・岡本城の拠点的城郭を核にし、上三川城・児山城・徳次郎城・大宮城・

御前原城・勝山城・高根沢城・阿久津城・飛山城の大規模戦時拠点的城郭を要地に配していたことが判明した。

さらにそれぞれの地域にはこれらの大規模城郭を核とする城群が形成されており、こうした重層的な城館配置による領国支配を行っていたのである。また、大規模城郭は個々に多気山城（宇都宮城）と結ばれていただけでなく、拠点相互の連携があり、地域共同体あるいは下部組織としての周辺中小城館を監督・統括する拠点でもあったのである。

犬養城　主郭北側空堀

２．城郭と領国支配

先に例示した大宮城・川崎城・玉生城・飛山城は、伝承に拠ればそれぞれ大宮氏・塩谷氏・玉生氏・芳賀氏が築城した城郭であった。しかるに地方を代々支配してきた彼等土着の家臣を転封してその在地性を剥奪し、城郭の管理者を直接任命する政策が採られたことは、天正末年の宇都宮氏においてそれだけ集権化が進んでいたことの証である。このことについては他に幾つかの城郭について関連する事象を見つけることができる。例えば、上三川城は横田氏の築城とされているが、後の城主は上三川を名乗り、しかも上三川氏、横田氏が共に家臣の中で一定の勢力・地位を保持していたにも関わらず、慶長頃の城主は今泉氏であったという。これを一系統の氏族の整然とした相続と理解する[28]のは無理があり、特に宿老今泉氏への城主の交代は宗家による施策であったと考える。史実であるかどうか確証がないが、慶長二年の宇都宮氏改易に際して今泉氏と芳賀氏が対立したという伝承は、案外この辺りの事情が背景にあるのかも知れない。また、岡本城の場合、系図に拠れば、城主は岡本氏から玉生氏へ移っているが、玉生氏が岡本と深く関わっていたことは、同氏が慶長以後岡本城近郊に帰農していることからも裏付けられる。祖母井城では、信濃守定久がおそらく天正十四年頃、「在所替」によって山田へ移っている[29]。またこの南隣の赤羽には西方領主であった太郎左衛門が在所していたことが文禄元年付横堀文書や「下野國檀那事」に記されている。さらに、「下野國

上三川城　主郭（北西隅から）

檀那帳」では、益子城や笠間城など天正末期に宇都宮宗家によって打倒された一族の城郭にも他地域から家臣が派遣されていることがみえる。これらのことから、宇都宮氏支城の配置換えは領国一円におよんでいたと推定されるのである。

下野國制覇を目指す小田原北条氏は、天正十年代に入ると宇都宮氏に対する攻勢を益々強めてきた。宇都宮氏宿老であった壬生氏はこれに同調して日光山と共に北条方に与し、西の境目は一挙に狭まってしまった。一方、北でもこれに呼応するかのように那須氏一党が領内に侵入し、天正十三年の薄葉ヶ原で敗戦した塩谷・宇都宮氏はここでも守勢に廻るのである。宇都宮氏は佐竹氏を盟主と仰ぎ、結城氏とも同盟関係を結んで[20]これに対抗するが、こともあろうか足下で益子氏の造反が起こってしまう。このような状況下、宇都宮氏は以前に増して権力の集権化を図らなければならなかった。その具体策の一つとして家臣を所領替えすることで在地と切り離し、支城の直轄化による直接統治を進めたのである。

では、こうした権力強化策は成功したのであろうか。宇都宮氏が豊臣大名に列してから僅か七年後に改易される際の様々な風聞・流説に接するとき、それは大きな疑問であると言わざるを得ないが、この点については別の機会に考察してみたい。

V　おわりに

以上、浅学であるのに加えて、紙面の都合もあり、憶測による断定的表現や論旨に十分な根拠を示していない箇所が多々あった。今後多方面からのご批判をいただきながら一層の研究を進めていく所存である。最後に、残された課題について数点を挙げて擱筆したい。

- 多気山城（宇都宮城）と拠点的城郭との関係を中心に述べたが、支城である城館相互の連携や「城群」における機能補完の実際についてはさらに具体例を示す必要があること。
- 中世における鬼怒川水運や「津」の事例、鬼怒川以外の水系（例えば田川、箒川、五行川など）を利用した交通の事例を蒐集すること。
- 年欠宇都宮尚綱書状（「小宅文書」『栃木県史中世史料編一』所収）にみえるように、家臣層が独自で築城を行ったことがあったのか。その究明。
- 壬生氏や那須氏など周辺国人領主や北条・佐竹氏における支城網、支配実態（例えば番役、使者、守護など）との比較検討。
- 「地利」「切所」「要害」「小屋」「楯」といった中世文書に表れる城館関係用語についての考察。
- 天正期以前の宇都宮氏領域支配の変遷の解明。

註

(1)　中世文書において「城」表記は合戦に関する記述の中に多く認められ、「城」は中世を通して「要害」「取出」「小屋」等と同様に戦に備えた防御施設であったと解釈できる。現在の城跡が特定できる例も県内全体で六十以上になる。一方、「館」用語の使用は「城」よりも遙かに多いが、「屋敷」「在所」を含めても特定の居館が比定できる例は十数例に過ぎない。多くの場合、「館」は領主そのものを指す言葉であり、一般的な語なのである。ちなみに近世文書では、中世まで「館」と表記されていたものを含めて殆どが「城」と呼称されるようになるが、このことは「城」意識が変革したことを顕わすものであるといえる。近世では「城」の中で日常的な生活が営まれることは当然のことであり、「城」と「館」とを機能で区別する必要がなくなったのである。

(2)　千田2000

(3)　こうした「村の館」の経営者が社寺であった例が存在するのか、今後の課題としたい。

(4)　松岡1991

(5)　宿については、市村1994、池上裕子1990「市場・宿場・町」『日本村落史講座　第２巻　景観１』中世都市研究会編2000「都市の求心力」『中世都市研究７』新人物往来社などの論考がある。

(6)　多気山城については、荒川善夫「中世下野の多気山城に関する一考察」『歴史と文化』に詳しい考察がある。

(7)　服部1995

(8)　多功に北条氏が初めて侵攻したのは元亀三年（1572）の事である。以後特に天正十二年からは頻繁に多功周辺を通過して宇都宮へ進軍している。

(9)　西方城については、「関東八州諸城覚書」に宇都宮方と記載されていることから天正十八年まで宇都宮氏の領国下であったとするのが通説である。しかし、壬生氏や皆川氏等周辺領主の動向を勘案すれば、これは大いに疑問である。さらに、現存遺構の複雑な城内ルートや横矢の多用は、宇都宮氏の他の山城にみられるものではなく、北条氏による改修が推定される。「覚書」成立の背景には佐野了伯が関わっていた可能性は以前から指摘されているところであるが、「覚書」が本とした情報は天正十八年時点よりも数年古い可能性がある。西方城と西方氏についての詳細な考察は別稿としたい。

(10)　佐竹氏が飛山に在軍したことが明らかなのは、「今宮祭祀録」に記された弘治三年のみである。しかし、宇都宮領への佐竹氏の出陣は天正十二年末から頻繁になっており、繋ぎの位置にある城館の中で大軍が駐屯できる広い郭をもち、北方の那須氏にも南方にも備える意味で最も相応しい飛山がその後も使用されたことは充分考えられる。

(11)　「高根沢町史」に高根沢城についての新しい考察がある。

(12)　服部英雄前掲書では、狼煙について事例を挙げて考察している。また、宇都宮氏領内付近の城館を結んだ狼煙ルートを想定したのが、西ヶ谷恭弘である（1989「古河城ー黒川城を結ぶ支城網」『歴史群像シリーズ14　真説戦国北条五代』　学習研究社　P174・175）が、これには所在が明らかでない城館が含まれていることや、領主間の境目を考慮していないなど、課題を残している。

(13)　蔵ヶ崎城が日光山勢力によって攻め落とされた報復に、宇都宮方は小倉城を攻略するが、城は直ちに日光山に奪還されたと伝えられている。

(14)　中世における水運については、川名登『近世水運史の研究』、豊田・児玉1970、甘粕他1984、服部1995に詳しい。

(15)　西導寺本　『宇都宮市史中世史料編』所収

(16)　「宇都宮記」「宇都宮興廃記」『宇都宮市史中世史料編』所収　「下野國檀那帳」『南河内町史』所収

(17)　「青木家文書」『塩谷町史』所収

(18)(19)(20)(21)　「小田部庄右衛門家文書」『栃木県史史料編中世二』所収

(22)　輪王寺蔵　『鹿沼市史史料編中世』所収

(23)　「歴代古案」『栃木県史史料編中世三』所収

(24)　「秋田藩文書」『栃木県史史料編中世三』所収

(25)　『上三川町史通史編第１章』

(26) 「佐八文書」『栃木県史史料編中世二』所収

(27) 天正末期、宇都宮氏を初め、壬生氏、皆川氏、結城氏等は北条方に与するか、敵対するか何度と無く離合集散を繰り返した。しかし、天正十八年に最も近い段階では、佐竹氏・宇都宮氏・結城氏が養子縁組による同盟関係を結び、反北条勢力として結集を図っていたことが明らかとなっている。（吉田正幸 1991「宇都宮朝勝の結城氏入嗣について」『戦国史研究』戦国史研究会）

参考文献

甘粕健他編集　1984「交通・運輸」『講座・日本技術の社会史　第八巻』　日本評論社
荒川善夫　1997『戦国期北関東の地域権力』　岩田書院
市村高男　1994「中世東国における宿の風景」『中世の風景を読む　2』　新人物往来社
児玉幸多・坪井清足監修　1980『日本城郭大系』　新人物往来社
齋藤慎一　1991「本拠の展開」『中世の城と考古学』　新人物往来社
佐藤信・五味文彦編　1995『城と館を掘る・読む』　山川出版社
千田嘉博　2000『織豊系城郭の形成』　東京大学出版会
豊田武・児玉幸多　「交通史」『体系日本史叢書24』
中沢克昭　1999『中世の武力と城郭』　吉川弘文館
橋口定志　1990「中世東国の居館とその周辺」『日本史研究』330号
　　1991「中世居館研究の現状と問題点」『考古学と中世史研究』　帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集　名著出版
服部英雄　1995「中世城館の研究視角」『景観にさぐる中世』　新人物往来社
藤木久志　1997『戦国の村を行く』　朝日新聞社
松岡進　1991「戦国期における境目の城と領域」『中世の城と考古学』　新人物往来社
他、栃木県史及び県内各市町村史、郷土誌

付録　宇都宮氏城・館類型表、所在図

1．記載事項の対象時代は天正期から慶長期である。従って対象時期に存在していない城郭や宇都宮氏領域外にあった城・館については省いた。これに相当する著名な城・館は、薬師寺城・真岡中村城・喜連川城・乙幡城・西方城・粟野城・鹿沼城・猿山城などがある。また、益子氏と笠間氏領内の城・館についても戦国末期の領域や滅亡前後の詳細が不明であることから省略した。

2．類型表の内容は、城・館名、所在地、主な城館主（伝承を含む）、立地・規模・形態等特記事項を記す。所在については現行の行政区としたが、一部に現在は使用されなくなった小字名が含まれている。

3．居館・居宅については、本稿の対象時代に当てはまらないものが含まれている可能性がある。また、記録のみで所在地が特定できないものについては、「か」と表記した。なお、本論の趣旨に従い、従来「○○城」と呼称されてきた居館についても「○○館」と表記し、備考欄に別称として従来の呼称を記載した。

4．作成に当たっては県内各市町村史所収の中世文書・記録・古地図それに現地調査を基本資料とし、近世史料を補助資料として使用した。近世史料の主なものは「宇都宮興廃記」「那須記」「宇都宮記」「宇都宮広巳家文書」である。この内、「宇都宮記」の城館に関する内容は「那須記」と重複しており、記述は「那須記」の方が誤りが少ないことから、「宇都宮記」の成立は「那須記」より後の事であると推定できる。また、「宇都宮広巳家文書」は（塩谷町史に所収）、塩谷郡内の特定城館に関する記載が「今宮祭祀録」に酷似していることや中世には存在しないはずの村名を冠した城館が記載されていること、個々の村々の変遷の事例から推察すると、成立は17世紀半ば以前に遡ることはないと考える。こうした近世文書の扱いは慎重に行うべきであるが、個々の城・館について丁寧に検証すると、現存遺構と照合するところも多々あることがわかる。そこで、これらの近世史料については、宇都宮支配領域の範囲、郡名の誤記の有無、村落の立地等の検討を行った上で選択し、中世史料の補助資料として採用した。個々の事例については今後も引き続き検討したい。

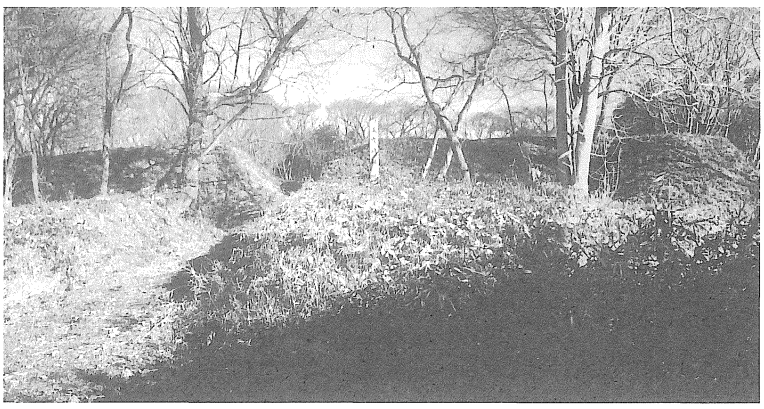
戦国末期における宇都宮氏領内の城館類型表

大規模拠点的城郭		
宇都宮城	宇都宮市御本丸町	宇都宮宗家　近世城郭の造営によって中世遺構は埋没。規模等不明だが、発掘調査によれば、並立型の館城であったか。延元元年（1336）初出。以後康正元年付文書（宇都宮等綱館とある）を除き、全て宇都宮「城」と表記されている。
多気山城	宇都宮市多気町字田下　城跡　灯籠下、字田野　清願寺　下河原　合八堀　粉川内　源石町　御殿山　割田　扇町	宇都宮宗家　天正四年頃から同十八年にかけて拡張整備。標高377m、比高197mの全山に展開。遺構は東山腹を除き、山林の中にほぼ完存。馬出曲輪や変形桝形等虎口の防御構造が発達している。南麓に城下町形成を表す地名が残り、割田遺跡発掘調査によって横矢をもつ外郭線の存在が判明。城域は1800m×2000m以上
多功城	上三川町多功字堀ノ内　堀込　台宿	多功氏　慶長二年まで存続か。天正十三年、北條氏と合戦。平城。遺構は主郭部の北辺に僅かに残るのみであるが、塁堀の規模や形状から戦国末期の改修が行われたことがわかる。 主郭80m×100m　城域500m×500m
犬養城	宇都宮市上欠町　字城山　根古屋　宿尻　馬場崎	元亀四年、犬飼氏居城の時、宇都宮氏が攻略したという伝承がある。宇都宮氏直轄の番城か。姿川と武子川が開析した低地に突き出す丘陵の突端に位置。比高15m。中枢部分が山林の中に完存。横矢や機能的な折り歪みが発達した城郭。　主郭60m×80m　城域250m×250m
川崎城	矢板市川崎反町字館の川　内根古屋上ヤシキ添　下ヤシキ添　古宿	塩谷氏　「檀那帳」によれば、天正末年から慶長頃の城主は籠谷氏。「八州諸城覚書」には川崎ノ城とあるが城主の記載はない。丘陵端部に位置。高速道路建設により西端が失われたものの中枢部分は公園・山林として現存。内川からの比高50m。 主郭44m×150m　城域340m×1200m
真岡城	真岡市台町字城内　馬乗馬場	芳賀氏　築城時期については諸説有るが、天文年間以降に修築されたことは確実。「八州諸城覚書」に「もうかのしろ」とある。五行川開析低地中の独立底丘陵上に立地。遺構はほぼ消滅。古図によれば連郭式で横矢が見られる。 城域300m×750m
岡本城	河内町中岡本字根古屋　城の内　城下　本宿　新宿	岡本氏　岡本氏は芳賀氏一族。玉生氏系図によれば、天文年間から城主は玉生氏。鬼怒川段丘端に立地し、比高20m。現存するのは主郭のみであるが、南東隅に横矢がみられる。主郭を城内の崖端に配置し、回郭式に郭を巡らせる縄張りは飛山城に相似。 主郭60m×80m　城域300m×500m
大規模戦時拠点的城郭		
上三川城	上三川町字上三川　馬場　東館	横田氏　上三川氏　今泉氏「八州諸城覚書」に「上ミね川ノ城」とあり、「八州城之覚」では、城主は上川左衛門督。慶長二年落城伝承がある「國誌」。縄張りは並立型を残すが、主郭は大規模改修されており、求心型城郭への移行の意図が窺える。主郭が現存し、虎口脇櫓台が横矢を掛ける形態は勝山城と相似。 主郭90m×100m　城域500m×800m
徳次郎城	宇都宮市徳次郎町　御城　隠岐殿屋敷　関口	新田氏　新田氏居城伝承は「宇都宮記」等にみえるが、同氏関連の文書は発見されていない。宇都宮氏直轄の番城か。田川の河岸段丘上に位置する。比高15m。中枢部分は山林としてほぼ完存。主郭南西部に虎口横矢の構造が見える。　主郭90m×105m　城域270m×400m
児山城	石橋町下古山字本城　北城　西城　中城　稲荷城	児山氏　「興廃記」によれば、永禄元年、児山兼朝は戦死したとあるが、城郭はこの後も存続か。平城。主郭周辺が山林の中に現存。県指定史跡。縄張りは各郭が独立性の強い並立型であるが、主郭は堀幅の拡張や虎口横矢等戦国末期の改修の痕が窺える。 主郭80m×90m　城域500m×1500m
大宮城	塩谷町大宮字西の宮	大宮氏　「興廃記」「群書類従」に大宮氏の記述がある。「今宮祭祀録」によれば、大宮城は天正十五年「再興」。以後宇都宮氏直轄の番城か。荒川開析低地中の独立低丘陵上に立地。中枢部は山林の中に現存。主郭虎口脇に櫓台が張り出し、横矢とする構造は上三川城・勝山城に相似する。 主郭60m×45m　城域500m×400m
御前原城	矢板市早川町　小字家城　御前ノ内　淡路屋敷　若狭廓　御門ノ内　西門　北門	塩谷氏　方形館から館城へ発展した形態。縄張りは並立型。主郭のみ現存。主郭虎口の折り歪みや規模の大きな内堀の存在から戦国末期まで使用されたことが考えられ、川崎城と併用された時期があったことが推定される。　主郭130m×120m　城域500m×1000m
飛山城	宇都宮市竹下町	芳賀氏南北朝時代に使用していたと文献にある。鬼怒川崖端に位置。比高20m。山林の中に塁堀が現存。国指定史跡。発掘調査で数度に及ぶ堀の掘り返しや堀障子が出土しており、大規模改修が数度行われたことが判明。堀の形状から戦国末期に存在していたことは確実。主郭は鬼怒川の浸食によって崩落した可能性がある。 城域400m×500m
勝山城	氏家町氏家字勝山	芳賀氏　築城は氏家氏によるとする伝承もある。周辺は南北朝時代頃から芳賀氏の支配が及ぶか。鬼怒川崖端に立地。比高10m。城跡は一時開発の手が入ったが、現在は主郭部分を中心に公園化されて保存。主郭虎口脇に櫓台が張り出し、横矢とする構造は、上三川城・大宮城と相似する。 主郭90m×100m　城域400m×500m
高根沢城	高根沢町上高根沢字台の原	高根沢氏　近世文書「宇都宮広已家文書」によれば、戦国末期の城主は町田氏。系図では、高根沢氏は南北朝期に再興、再興高根沢氏は益子氏一族。五行川や野本川が開析した低地に面する崖上に立地。遺構はほぼ消滅し形状は不詳。現存遺構から駐屯地との考察もある。残存する堀の規模から戦国末期の使用を推定。古記録に拠れば城域は約400m四方。
阿久津城	高根沢町中阿久津字西台	岡本氏　野沢氏今泉氏「今宮祭祀録」では天正七年に今泉氏支配。宇都宮氏（芳賀氏）直轄の番城か。天正十三年付文書中の「石居の地」は当城を指すという。城東字石末玄番屋敷所在の石礎館（大館）は平時の居館であったか。城内を辰街道が通過。鬼怒川開析低地と五行川・野本川開析低地に挟まれた幅の狭い丘陵部を占拠。 城域250m×600m

徳次郎城と田川

館城		
平出城	宇都宮市上平出町北組　小字御城中城　北城	平出氏　川馬氏　鈴木氏　平石氏　小字名から主郭の周辺に複数の郭が存在していたことが推定される。現状は土塁のごく一部が残るのみであるが、館城の面影をたどることは可能である。北方に広琳寺あり。 主郭は50m四方。
馬場城	氏家町氏家	氏家氏　増渕氏　方形館を基本としているが、古図によれば虎口横矢の発達が見られ、また複数の郭から構成されていたことが窺える。現存するのは主郭の土塁一部のみ。 主郭76m×110m　城域145m×180m
祖母井城	芳賀町祖母井堀ノ内	祖母井氏　河田氏　芳賀氏　現在は主郭南東部に土塁が僅かに残るのみであるが、かつては大規模な土塁が巡っていたことは推察できる。縄張りの詳細は不明。「祖母井村郷土誌」によれば、城域は約160m×330m。
高橋城	芳賀町東高橋小太郎内	高橋氏　大麻氏　遺構は消滅。古絵図が残るが、虎口や建築物など信憑性は疑問。ただ、図中に「本城」「付城」の記述があるほか、複数の郭が描かれており、参考となる。「水橋村郷土誌」によれば、城域は340m×400m。
赤羽城	市貝町古城　小山屋敷　内堀道外堀道	赤羽氏　西方氏　現在は主郭南辺の土塁と主郭南側の郭の塁堀の一部が残る。大規模な塁堀と虎口横矢の発達から戦国末期の改修は確実。かつては現存遺構の周囲にも塁堀が存在していたという。 主郭は100m前後四方か。城域は推定で200m×300m
江曽島城	宇都宮市江曽島町館合	江曽島氏　館城に分類したのは堀幅が20mあったとみられることから。ただし、縄張りは不明で居館・居宅であった可能性があり、また、天正末期に使用されていたという確証はない。江曽島氏についても不詳。堀跡と想定した範囲から推定すると城域は126m×230m。
横田城	宇都宮市兵庫塚町長寸館	横田氏　田代氏　館城に分類したのは記録に見る城域が広いため。縄張りは五稜形であったというが、現存遺構は僅かでこれを確認することはできない。天正末期には居館規模であった可能性もある。古記録による城域は270m×180m
小規模城郭		
猪倉城	今市市猪倉	神山氏　板橋城の対の城。山頂部の3郭を中心とする山城で、主郭は22m×24m、標高420m、比高190m。鹿沼徳雪斎の乱が勃発した天正四年（1576）に落城の伝承がある。山城としてはその後も存続か。居館地は山麓に想定される。 山頂部の郭が現存。
岡城	矢板市片岡字梶が沢城山	片岡氏　岡氏　塩谷氏の支城。内川の河岸段丘端に立地。御前原・川崎手前の内川の抑えの城。連郭式縄張りで全体の規模は大きくないが、虎口張り出しがあり、主郭北側に大堀切が現存する。別称「前岡館」 主郭80m×70m城域250m×150m
藏ヶ崎城	今市市蔵ヶ崎久保	大門氏　上郷衆　日光山に対する押さえの城。山城であるが規模は不明。天正十五年十月二十日落城したことが文献に記されている。
桑窪城	高根沢町桑窪	矢口氏　五行川開析低地東側の丘陵に立地。烏山道抑えの城。稲毛田城支城として正平十六年落城の伝承がある。単郭を基本としながら、虎口横矢の構えに戦国末期の城郭の特長が見える。主郭遺構はほぼ完存。居住区は南側の平坦地にあった。 主郭40m×70m城域250m×250m
小山城	今市市小林	君島氏　鬼怒川右岸の独立丘陵上に立地。篠井−船生の繋ぎと鬼怒川を抑える城。標高350m、比高60m。
逆面城	河内町逆面	逆面氏　山田川右岸の丘陵上から東南山麓に立地。瓦谷−羽黒道の抑え。山頂部に詰めの城を設け、東南山麓に居館を置く。間の山腹にも郭を連続して配置。詰めの城の比高は40m。山林の中に遺構を残す。山頂には白山神社が所在する。 城域200m×100m
塩原城	塩原町要害	塩原氏　君島氏　箒川上流の段丘端に立地。三依方面の抑えの城。居館は箒川対岸の今井館であったという伝承があるが不詳。小字の示すとおり「要害」であったか。 城域500m×500m
玉生城	塩谷町玉生　小字要害　寝小屋	玉生氏　石塁氏　船生−川崎道の抑えの城。山頂に詰めの城、東山麓に居館を置く。詰めの城の標高は260m、比高は60m。山林中に遺構が現存するが、居館地は消滅。山頂に伯耆根神社が鎮座。「下野國檜那帳」によれば、玉生氏は笠間氏滅亡後の笠間城主。 城域200m×200m
船生城	塩谷町船生要害山　要害屋敷	君島氏　神長氏　鬼怒川左岸の山岳地帯先端に位置する。高徳−玉生道と鬼怒川の抑えの城。山頂部に詰めの城を設け、南東山麓に居館を置く。詰めの城は階段状の腰郭を巡らす。山城部分が山林の中に現存。 標高360m　比高80m　城域250m×300m
松が嶺城	矢板市上太田字松小屋	岡本氏　若色氏　祖母井氏　塩谷氏の支城。内川支流中川右岸の丘陵上に位置。御前原・川崎北方の抑えの城。 標高270m、比高50m。
舟戸城・水沼館	芳賀町西水沼小字舟戸・番城内	水沼氏　風見氏　舟戸城は野本川の開析低地の西に接する丘陵の先端に位置する。比高20m。連郭式縄張りで3郭を基本とする。城域は比較的広く、水沼館からの本格的な移動が行われた可能性もある。水沼館の遺構は消滅。 舟戸城城130m×550m
文谷城	市貝町文谷小字カジヤ	杉山城・村上城の対の城。小貝川右岸の丘陵に位置。比高20m。丘頂部の主郭を中心に螺旋状に帯郭を配する。平坦地が狭く、居館は別にあったか。天正十三年以降、那須氏が支配とも。 城域125m×300m
鶴ヶ淵城	藤原町上三依横川	会津南山道の抑え。慶長五年に改修か。山城と街道を抑える長堤から構成。山城は稜線沿い100m×300mの範囲に郭を配置。
冬室城	上河内町冬室	西山城とﾕｳｶｴ城の2城。標高200m～250m、比高20m～70m。双方とも単郭を基本とする山城。西山城には戦国期陣城の特色が窺える。
府所城	鹿沼市府所本町	飯岡氏　黒川左岸の段丘端に位置。鹿沼城の対の城。北東麓に武家屋敷が所在したという伝承がある。城跡は住宅造成によって消滅削平。天正十八年、結城氏の攻撃により落城の伝承があるが疑問。事実で有ればこれ以前に壬生氏が支配か。構造は単郭を基本とする割に面積が広く、鹿沼城攻めの陣城である可能性も考えられる。 城域250m×200m
高徳城	藤原町高徳	高徳氏　柄倉城の対の城。山頂に物見を置き、南山麓に居館を設ける。物見の標高は460m、比高が150m。遺構は堀切が残るものの、明確な平坦地は小さく、狼煙台程度の構えか。山麓の居館地の遺構は消滅。伝承に拠れば方90m。
横倉城	宇都宮市下横倉	横倉氏　徳次郎城と多気山・宇都宮方面との繋ぎの城。居館背後の山頂に詰めの城を置く。居館地は消滅。山城は2郭を中心とする。標高200m　比高40m
泉城	塩谷町泉琴平山	泉氏　大宮−玉生繋ぎの城。山頂に郭があるが、単郭。居館地は山麓にあったと考えられるが不詳。
雨乞山城・田中館	宇都宮市新里町	田中氏　戸祭氏　雨乞山城は多気山城北方の物見。居館地は南東約750mの田中館。雨乞山城の標高は330m、比高は140m。田中館は50m×100mだが、遺構は殆ど消滅。
風見城・欠下館	塩谷町風見明神山・欠下	風見氏君島氏風見城は詰めの城であるとともに鬼怒川の物見と大宮城の繋ぎの山城。居館地は東方に約750m離れた欠下館と思われるが遺構は消滅。風見城の標高は225m、比高50m。
寅巳山城・小池館	今市市山口	神山氏　小池氏　福田氏　寅巳山城は日光道の物見。居館地は南方750mの小池館と思われるが遺構は消滅。寅巳山城の標高は445m、比高180m。
右岡城・峯山城	上河内町中里	中里氏　右岡城は詰めの城。主郭50m×40m。峯山城は丘陵上に築かれた方形居館で腰郭をもつ。比高25m。主郭30m×50m。

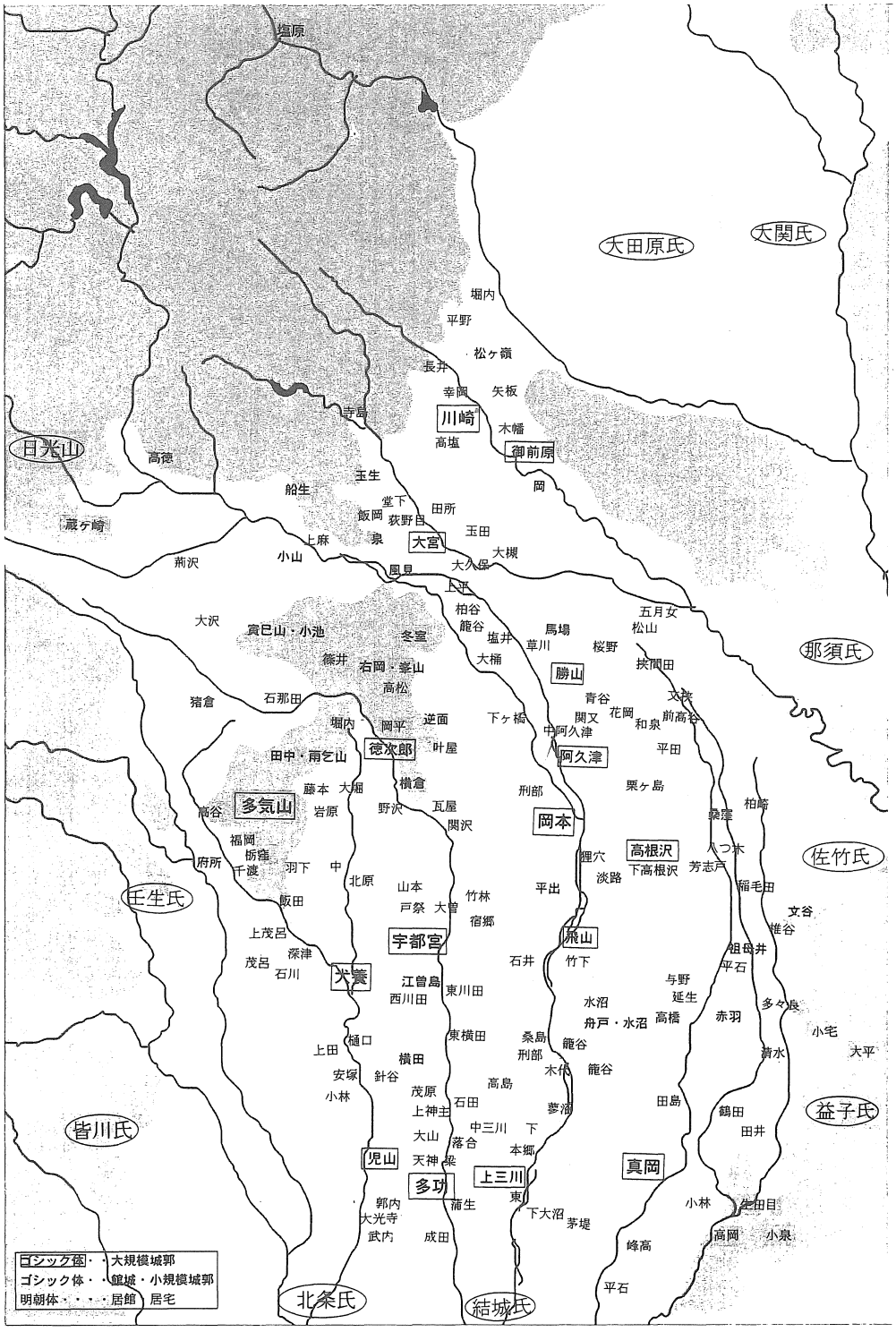
居館・居宅			
淡路館	宇都宮市刈沼町入　段丘上館　直井氏　100×110m 別称「淡路城」	石井館	宇都宮市石井町堀ノ内・古城内　平地館 石井氏　野沢氏　別称「石井城」
石那田館	宇都宮市石那田町岡　段丘上館　小池氏　福田氏 100×60m　別称「石那田城」	岩原館	宇都宮市岩原町堀ノ内　平地館　高橋氏　60×100m
大堀館	宇都宮市新里町大堀　平地館、外郭あり　。半田氏 80×90m　別称「大堀城」	岡平館	宇都宮市大網町　平地館、背後の大峰山に物見か。 新田氏別称「猿田館」
刑部館	宇都宮市東刑部町堀ノ内　平地館、外郭あり。 刑部氏　40×90m　別称「刑部城」	上籠谷館	宇都宮市上籠谷町堀ノ内　段丘上館 籠谷氏　大塚氏　芳賀氏
瓦屋館	宇都宮市瓦谷町　平地館　瓦屋氏　大麻氏　平野氏	北原館	宇都宮市駒生町北原　平地館。古記録によれば、城域は７～ ８ha別称「北原城」
桑島館	宇都宮市上桑島町小原・西門　平地館、外郭あり。桑島氏 50m四方。　別称「桑島城」	篠井館	宇都宮市篠井町上篠井堀ノ内　段丘上館　大橋氏 別称「篠井城」
戸祭館	宇都宮市戸祭元町中城　平地館　戸祭氏　別称「戸祭城」	中館	宇都宮市駒生町宿　平地館　70m四方。 別称「中城」
羽下館	宇都宮市下荒針町羽下　段丘上館	東川田館	宇都宮市東川田町大城内　平地館　川田氏 50×70m
樋口館	宇都宮市幕田町南坪　平地館、外郭あり。　樋口氏　90×50m 別称「樋口城」	藤本館	宇都宮市新里町藤本　段丘上館、外郭あり。 高橋氏　別称「高橋館」「高橋城」
堀ノ内館	宇都宮市徳次郎町堀ノ内　平地館	狸穴館	宇都宮市満美穴町柏木　段丘上館　大谷氏 別称「狸穴城」
茂原館	宇都宮市茂原　段丘上館　茂原氏　別称「茂原城」	荒九鬼館	多気山周辺か。　倉沢氏　戸室氏　麦倉氏　金沢氏
飯田館	宇都宮市飯田町地内か。　飯田氏	大曽館	宇都宮市大曽町字中堀か。大曽氏
木代館	宇都宮市木代地内か。　今井氏　五月女氏	宿郷館	宇都宮市宿郷地内か。矢板氏
関沢館	宇都宮市関沢町地内か。　関沢氏	竹下館	宇都宮市竹下町字館下か。　岡田氏
竹林館	宇都宮市竹林町地内か。竹林氏	田野館	宇都宮市田野町地内か。佐　藤氏
西川田館	宇都宮市西川田町地内か。　荒井氏	野沢館	宇都宮市野沢町地内か。　中山氏青木氏
針谷館	宇都宮市針谷町地内か。　針谷氏	東横田館	宇都宮市東横田地内か。　神戸氏
福岡館	宇都宮市福岡地内か。　福岡氏	山本館	宇都宮市山本町字屋敷か。　山本氏
岡本刑部館	河内町中岡本本宿　平地館　岡本氏	下ヶ橋館	河内町下ヶ橋字御城　平地館　下橋氏 別称「西下ヶ端館」
叶屋館	河内町叶谷地内か。　長井氏		
大桶館	上河内町下小倉字堀ノ内　平地館　大桶氏 別称「小倉城」　清泉寺所在	粕谷館	上河内町上小倉字堀ノ内　平地館　粕谷氏
籠谷館	上河内町上小倉　平地館　籠谷氏　小室神社鎮座	塩井館	上河内町上小倉宮ノ前　平地館　小倉氏　所氏 別称「所館」
高松館	上河内町高松地内か。		
石田館	上三川町石田　平地館、外郭あり。 外郭域150×110m	大山館	上三川町大山　平地館、外郭あり。 外郭域150m四方。
落合館	上三川町川中子平地館落合氏	下館	上三川町上郷　平地館
高島館	上三川町西汗　平地館、外郭あり。　高島氏 外郭域120m四方。	蓼沼館	上三川町東蓼沼　平地館　黒須氏　100m 四方天文八年付文書「蓼沼小屋」か。
天神館	上三川町多功　平地館　石崎氏	梁館	上三川町梁　平地館　梁氏　80m四方。
本郷館	上三川町東汗　平地館　篠崎氏90m四方。 別称「上館」	上神主館	上三川町上神主字堀ノ内か。　稲葉氏
蒲生館	上三川町上蒲生殿山か。　蒲生氏	中三川館	上三川町中三川地内か。　神部氏　鈴木氏
東館	上三川町東館地内か。　上三川城別郭と思われる。		
成田館	南河内町成田字掘ノ内か。　石川氏	落山館	河内郡内か、不詳。　落山氏



桑窪城　主郭南面土塁と虎口

居館・居宅

木幡館	矢板市木幡小字八ヶ城　平地館　三上氏	幸岡館	矢板市幸岡　段丘上館　幸岡氏　別称「幸賀館」
長井館	矢板市長井小字堀ノ内　平地館　渡辺氏　手塚氏	堀之内館	矢板市下伊佐野堀ノ内　平地館鈴木氏
矢板館	矢板市矢板小字堀ノ内　平地館　矢板氏	大槻館	矢板市大槻地内か。大槻氏
高塩館	矢板市高塩小字古屋敷か。高塩氏	玉田館	矢板市玉田地内か。玉田氏
平野館	矢板市平野地内か。平野氏		
五月女館	喜連川町早乙女地内か。五月女氏		
岡本和泉館	高根沢町花岡大塚　平地館　岡本氏	柏崎館	高根沢町下柏崎小字屋敷前　平地館　鈴木氏
花岡館	高根沢町花岡小字内屋敷　平地館　花岡氏	平田館	高根沢町平田番城地　平地館　平田氏
青谷館	高根沢町大谷地内か。粕谷氏　阿久津氏	栗ヶ島館	高根沢町栗ヶ島地内か。矢口氏　芳賀氏　直井氏
関又館	高根沢町関又地内か。若色氏	中阿久津館	高根沢町中阿久津地内か。岡本氏
文挟館	高根沢町文挟地内か。高根沢氏	前高谷館	高根沢町前高谷地内か。平出氏
桜野館	氏家町桜野小字古桜野　平地館　粕屋氏　粕谷氏 別称「桜野城」	挟間田館	氏家町挟間田小字堀ノ内　平地館　挟間田氏 別称「挟間田城」
松山館	氏家町松山小字本田坪　段丘上館　松山氏 別称「松山城」	草川館	氏家町草川付近か。草川氏
大久保館	塩谷町大久保小字西郭　平地館　大久保氏 40×25m	寺島館	塩谷町上寺島　平地館　和気氏
堂下館	塩谷町道下　平地館　川上氏　會曽川氏	飯岡館	塩谷町飯岡地内か。飯岡氏
上平館	塩谷町上平地内か。上平氏	荻野目館	塩谷町荻野目地内か。上山氏
上麻館	塩谷町上沢地内か。上沢氏　大麻氏	田所館	塩谷町田所地内か。田所氏
赤坂館	塩谷郡内か、不詳。赤坂氏	上谷館	塩谷郡内か、不詳。籠谷氏
中村館	塩谷郡内か、不詳。塩谷氏		
茅堤館	真岡市茅堤小字下館山　平地館　芳賀氏	小林館	真岡市小林三宮神社東　平地館　小林氏　芳賀氏
籠谷館	真岡市下籠谷小字山前　段丘上館　籠谷氏	下大沼館	真岡市下大沼小字古屋敷　平地館　椿氏
清水館	真岡市清水小字堀ノ内　平地館　清水氏	田井館	真岡市東田井堀ノ内　平地館　須藤氏
田島館	真岡市田島　平地館　橋本氏　芳賀氏	鶴田館	真岡市鶴田屋敷内　平地館　平沢氏
高岡館	真岡市高岡地内か。高岡氏　芳賀氏		
小泉館	益子町小泉　平地館　小泉氏	大平館	益子町大平字掘ノ内・竜害　段丘上館　飯村氏
小宅館	益子町小宅字日向　段丘上館　小宅氏 110m四方。別称「小宅城」	生田目館	益子町生田目館山・上城・中城・下城　段丘上館 生田女氏　館城の可能性もある。
稲毛田館	芳賀町稲毛田小字屋敷添　平地館　綱川氏 正平十六年落城の伝承がある。	平石館	芳賀町下延生綾住　平地館
水沼館	芳賀町東水沼字宿　平地館　佐賀氏　三津沼氏	下高根沢館	芳賀町下高根沢地内か。高根沢氏
芳志戸館	芳賀町芳志戸地内か。大谷津氏	延生館	芳賀町上延生古屋敷か。祖母井氏　延生氏
八つ木館	芳賀町八つ木堀ノ内か。八木氏	与野館	芳賀町与能堀ノ内か。君島氏
椎谷館	市貝町椎谷小字堀ノ内　段丘上館　椎貝氏	多々良館	市貝町多田羅古屋敷　平地館　多々良氏
峰高館	二宮町物井峰高　平地館　豊田氏　160×100m	平石館	二宮町鹿　平地館　平石氏　別称「鹿館」
大島館	芳賀郡内か、不詳。大島氏	菅谷館	芳賀郡内か、不詳。菅谷氏
田野間館	芳賀郡内か、不詳。田野間氏		
郭内館	石橋町下石橋郭内　平地館	大光寺館	石橋町東前原大光寺　平地館、外郭あり。 外郭域120×150m　別称「大光寺城」
武内館	石橋町下大領小字小武内　平地館　橋本氏		
上田館	壬生町上田　平地館　大関氏　別称「上田城」	小林館	壬生町北小林　平地館　山の井氏
安塚館	壬生町安塚地内か。石川氏「上長田館」と同一か。		
石川館	鹿沼市上石川堀ノ内　段丘上館　石川氏　北条 氏別称「石川城」	上茂呂館	鹿沼市上茂呂堀ノ内　平地館　山崎氏
高谷館	鹿沼市高谷　平地館、外郭あり。松崎氏 150×100m　別称「高谷殿」	千渡館	鹿沼市千渡　平地館　宇賀神氏　100m四方。 別称「千渡城」
栃窪館	鹿沼市栃窪堀ノ内		
深津館	鹿沼市深津　段丘上館、複郭。小林氏 外郭域150×100m　別称「深津城」	茂呂館	鹿沼市下茂呂　平地館、複郭。茂　呂氏市田 氏外郭域115×200m　別称「茂呂城」
大沢館	今市市大沢町　平地館　大沢氏　近世大沢御殿地	荊沢館	今市市荊沢地内か。粕谷氏



第４図　戦国末期における宇都宮氏領域の城・館分布図